

小特集2 ■ ASIAGRAPH2013 in kagoshima&Tokyo 報告



ASIAGRAPH2013 in Kagoshima Guest 左より、施文祥氏（General Manager of CGCG Inc.）、池坊美佳氏（華道家）、猪子寿之氏（チームラボ代表）、富田勲氏（作曲家）、樋口真嗣氏（映画監督）

■総括

池井 寧（ASIAGRAPH Program CoChairs）
首都大学東京

小木哲朗（ASIAGRAPH Program CoChairs）
慶應義塾大学

今年の ASIAGRAPH は、ペーパーセッションとアートツアーに関しては、鹿児島大学の川崎洋先生、赤木康宏先生を中心に9月27日～29日にかごしま県民交流センターで開催され、匠賞・創賞の受賞記念シンポジウムは10月24日～26日に日本科学未来館で開催された Digital Content Expo の中で行われた。イベントとしてはやや変則的な形になったが、ここでは鹿児島と東京のシンポジウムを合わせて参加報告をさせていただく。

■ペーパーセッション&アートツアー参加報告

松田侑己、濱口諒平
慶應義塾大学

ペーパーセッションに先立って行われたアートツアーでは、まず薩摩の小京都と称されている知覧の武家屋敷、太平洋戦争時に知覧から出撃した特攻隊員の様子を伝える特攻平和会館を訪れた。その後指宿へ向かい、鹿児島出身の画家の作品やパプアニューギニアの民族美術など多様な作品を展示している岩崎美術館の見学、岩崎ホテルでの砂風呂の体験などを行った。アートツアー全体を通じて、豊かな自然の下で育まれた素晴らしい歴史を感じることができ、学会が行われた鹿児島という地についての理解を深めることができた。

ペーパーセッションでは24件の口頭発表と6件のポスター発表が行われた。

東京大学の藤澤慶氏の発表は、患者個別の脳循環モデルと3次元可視化手法の提案で、患者ごとの属性や状態にかかわらず適応できるモデルとして、医学的な視点でも有用な研究であると感じた。

放送大学の仁科エミ先生の発表は、静止画・動画の精細度の違いが視聴者に及ぼす生理・心理的影響と題して

行われ、筆者の研究に通ずる部分もあり大変興味深く発表を聞かせて頂いた。

首都大学東京の池井寧先生の身体感覚の超臨場感に関する研究は、画面の動画に合わせて座っている被験者に振動、臭い、風などの五感に働きかける影響を与えることで実際に自分がその場にいるかのような追体験をさせるシステムの構築で、座っている状態でもその場で歩いている感覚に落としこむメカニズムは非常に興味深かった。

九州大学の妹尾武治先生のベクシオン強度を変調する3つの新しい技法では、音楽のテンポやアルコールの摂取量に依存してベクシオンの強度が変化する可能性が示された。

同じく九州大学の川畑泰子氏のヒット現象の数理モデルの応用に関する研究発表では、facebook ページ、音楽コンサート、舞台役者の評判分析を行なう方法が提案され、今後メディアの評判分析を行なう上で有用な研究であると感じた。

また、東京大学河口洋一郎先生と施文祥氏との対談セッションがあった。CGCG Inc. の代表としてジョージ・ルーカスにも認められる施氏は、台湾の自社を仕事の速さ、クオリティという点で世界中の会社と差別化させた手腕はとて素晴らしい、社員のライフスタイルを重視する点も国内では中々見られないモデルだと感じた。

今回初めての ASIAGRAPH への参加であったが、非常に吸収出来た部分が多く、今後の筆者の研究に生かせる部分が多かったと感じる。

■かごしまアートフェスタ

赤木康宏（ASIAGRAPH2013 in Kagoshima 幹事）
鹿児島大学

同時に開催されたかごしまアートフェスタでは、河口洋一郎先生と作曲家の富田勲氏の学生時代から現在に至るまでの作品が対比的に紹介され、作品へのこだわりや新しいものへの好奇心などの、創作活動に向けられるパワーが衰えることなく、ますます増していることが感じられた。特に2人が同時期に、宇宙をテーマにした作品制作に取り組んでいたことが大変面白く感じられた。

富田氏からは、ボーカル音声合成ソフトウェアである初音ミクとコラボレーションを行った際のエピソード紹介があり、大学生などの若者からも強い関心をもたれていたことが印象的だった。そのエピソードの中で、オーケストラの演奏とプログラムの同期をとる際に、タイミングの入力をプロの演奏家に依頼したというところに、芸術家ならではのこだわりが感じられた。

樋口真嗣監督の作品紹介では、映画「巨神兵東京に現わる」のメイキング映像を多数ご紹介頂き、CG とは異なる、ミニチュアモデルによる特撮の魅力が分かりやすい内容であった。特に、一見 CG 映像とも思える光線や爆発などの視覚効果が、全て従来のアナログ的な特撮技法による表現であることに驚いた。また、現在はミニチュアを多用した撮影はコスト面などの問題で難しいということをユーモアを交えてお話されていることが印象的だった。

「おかえり、はやぶさ」の上映会では、はやぶさの旅立った内之浦宇宙空間観測所からの新型ロケット打ち上げが当イベントの直前にあったこともあり、鹿児島県と宇宙とのかかわりが強く印象付けられるものであった。また、直前のトークイベントで、富田氏や樋口監督から、映画音楽や映像の演出技法に関する話題があったこともあり、作品の内容だけでなく、演出面の工夫などにも思いをはせながら鑑賞することが出来た。



かごしまアートフェスタ パンフレット

■匠賞・創賞 授賞記念シンポジウム
「技術とアートの融合が生み出す新しい表現」

伊藤啓一
未来工学研究所

今年の匠（たくみ）賞は映画監督の樋口真嗣氏、創（つむぎ）賞はアーティスト清川あさみ氏が受賞した。樋口氏は『ガメラ 大怪獣空中決戦』の特技監督、『ローレライ』『日本沈没（2006年版）』の監督などで活躍さ

れている。清川氏は写真に刺繍を施す独特な手法による「美女採集」「AKB48×美女採集」などの作品集や、『幸せな王子』『人魚姫』などの絵本の制作など幅広く活躍されている新進気鋭のアーティストである。この受賞を記念して、「技術とアートの融合が生み出す新しい表現」をテーマに、東大教授・CG アーティストの河口洋一郎氏がモデレーターを務め、シンポジウムが開催された。

清川氏は『美女採集』について講演した。「私が気に入った美女を写真で“採集”し、その美女のイメージに合わせた動植物の装飾を施した」という。「その当人からイメージが嫌だと言われたことは無い」とのことで、「夏木マリさんは古代生物の様に感じたので、アンモナイトをイメージして作成した」。また、「男性をモデルにしている作品『男糸（danshi）』を昨年発表しており、こちらはモノクロームで歴史上の人物などをイメージした作品になっている」。これらの作品は2次元の写真を印刷し、糸やビーズを刺繍することで立体感を生み出す独自の芸術作品を作りだしている。

樋口氏はジブリ映画の『風の谷のナウシカ』に登場した巨神兵を主演として、庵野秀明氏と共作した最新作の短編映画について講演した。この『巨神兵東京に現わる』という映画は、巨神兵による都市破壊をテーマにしたもので、映画の一部が上映された。また、「CG を一切使わずに特撮だけで完成させるため、最高の特撮スタッフを集めて完成させた作品」ということで、撮影時のメイキング映像も流された。ミニチュアの街並やその破壊の様子はゴジラやガメラなどの日本映画の伝統である特撮を再認識させるものであった。「現在、新潟県立近代美術館で『特撮博物館』を開催しており、映画の上映がされている」と語った。

CG 映像になれた筆者にとって驚くことも多く大変有益な講演であった。また、実際の作品を見てみたいと思わせた。ジャンルの違いこそあれ、CG 以外の表現を再認識させてくれたシンポジウムで、会場を大いに沸かせた。



左より、河口洋一郎氏、清川あさみ氏、樋口真嗣氏